

## リモージュ留学とゼミ 上村暹子

私の場合、リモージュ大学への留学を終えて、帰国してからの4年ゼミは半年間だった。リモージュでは古典文学コースに属し、ラテン文学やギリシア文学、アリストテレスの哲学まで学んだが、授業にはなかなかついてゆけず、苦労したものである。

現地ではストライキが多かった。はじめての経験に驚き、ホストファミリーに愚痴をいうと、笑いながら「Bienvenue en France!」といわれた。日本にストはないと話す、と、「じゃあ文句があるとき、日本人はただ黙っているの?」と逆に聞かれ、答えられなかったことがある。自分のいたいこと、主張したいことを毅然として表現できるというのは、じつは大切なことだと感じた。

卒業論文でも明確になったことだが、ヨーロッパ人は中世のころから、権力の下敷にはならず、自分の権利を主張できるという考えをもっていた。それでは日本人はどうかと考えていたとき、ゼミでたまたま聞いた話は興味ぶかかった。

日本の大学行政では、ある時期から「デモのおこらない体制づくり」をしてきたらしい。1960年代の全国規模の学生運動、69年の安田講堂事件などを「教訓」にして、大学のキャンパスを1・2年と3・4年にわけ、反抗のエネルギーが分散するようにしたともいえる。実際、はじめの2年間はサークル活動に、3年からは就職活動にエネルギーを注がせれば、文句があっても「言わせない」空気をつくれる。学生がデモやストライキをすることもなくなる。フランスから日本へ戻って、あらめて気づいた日本のおかしな点のひとつが、このことだった。

日本の大学では、4年次どころか3年次でもう就職活動をはじめ、授業にあまり出ない学生も多い。「新卒」の称号をもらうためだけに、早くからの就活を強いられ、さして受講もしない大学に在籍する意味があるのだろうか。その点フランスでは、いちどディプロムをとればよほどのことがないかぎり、何年後に就職しようと条件が変わらない。だから在学中は勉強に身が入るのである。

たしかに大学は授業だけの場ではなく、サークルなどの課外活動も一種の「学び」ではある。それにしても、学ぶよりも遊んだり就活をしたりを優先する学生の多い日本では、大学も「ブランド」でしかないように見え、いささか納得がいかない。

もちろんフランスの大学にもよいことばかりではないが、朝は8時には始まり、2時間という長い授業時間にもかかわらず、寝ている学生などいない。授

業を真剣に受けている学生のなんと多いことか。彼らの姿勢を見ていて、私は自分の日本での大学生活を思いだし、とてもはずかしく感じたものである。

リモージュでの話が長くなったが、帰ってきてからの半年間をふりかえると、自分もまず上記の日本のルールに乗って、就職活動をせざるをえなかった。水曜の映画には参加できなかったのも悔やまれる。だが見ることのできた映画のなかでも、『惑星ソラリス』はよかった。生命の基本である水のつくりだし、人間の模造品すなわち「人間のようなモノ」に対する人間たちの接し方に、ある問題がひそんでいた。人間は人間であり、モノ、オブジェではないと考えてしまうのは、もしかすると人間のエゴではないのだろうか。

「コレクション」についての発表と講義もおもしろかった。『さかしま』や石の話、19世紀のグラン・マガザン（百貨店）、アンティエ・グメルスの絵、桑原弘明のスコープも、「コレクション」ということにつながっていた。

コレクションは感じるもの・聴くものではなく「見るもの」だと私は思う。音のコレクションはむずかしい。音源を収集しているつもりでも、それは結局CDやカセットの収集にすぎない。目に見えるものが展示されなければコレクションにはならないのだ。

一方、交換価値はあっても使用価値のないもの、それがコレクションだとすると、百貨店の商品は「商品」であるかぎりコレクションではない。それが個人のものになって配列されたとき、はじめてコレクションになるのだろう。

『さかしま』のデ・ゼッサントの黄金の鎧をきた亀も、輝ける石たちも、アンティエさんの錬金術ふうの絵も、桑原弘明さんのスコープのなかの回転木馬のある部屋も、すべて誰かが「コレクション」した「見るもの」である。見ることで何かを感じとれば、その人にとって独自の価値が生まれ、流通価値をこえる。ゼミで扱われたのは、その先の問題である。

とにかくこのゼミでは、多くの人意見に触れながら、さまざまなテーマで考えることができるのが魅力だった。それはさながら、ゼミという独立国へ毎週月曜にだけ入国して、異文化や異人種の交流ができるという感じに近いかもしれない。なんともすばらしいことに、パスポートもいらず、入国期間にも制限がない。さらに魅力的なのは、毎年ここの住民の顔ぶれが変化してゆくこと。こんな国への半年間の出入りは、私に多くの刺激をもたらした。

いや、なんといっても嬉しいのは、私自身、これからもこの国の住人でいられるということである。